

一二月八日 月曜日

昨日午後五時アイドルワイルド空港を出て今朝一〇時半オルリー空港に着いた。

TWAの大西洋横断無着陸便に乗るのはこれが始めてで、ただの観光旅行だったらどんなに楽しかっただろうか。しかし、あたしの目の前には伯母との重要な相談事が控えている。どう切り出したらいいかしら。コンスタレーション機が滑走路をすべり始めるとそれが心配になった。

伯母はあたしの母より二つ年上、晩婚で自分の子はなく、あたしを何時でも自分の娘のように可愛がってくれる。母がなくなった後、伯母とあたしの結びつきはもっと密接になり、父が羨ましがるぐらいで、困ったことがあれば、父より先に伯母と相談するのが常だった。だけど伯母はあたしが、見知らぬ人に肌を許したことをどうとるかしら。例え伯母が赦してくれても、あの謹厳率直な伯父はどう思うだろうか。それにあたしは墮胎ということを考えている。一步間違えば、伯母の愛を失ってしまうかもしれない。後方に小さくなっていくニューヨークの黄昏の美しいスカイラインを眺めながら、あたしはぞつとして、その恐怖から覚めることができなかつた。

墮胎をせずにあたしが一人で子供を育てることができるだろうか、と考えてみた。出来ないことはない。児童文学の作家として成功すれば、家にいて書き物をしながら子供の面倒をみることが出来る。父の後を継いでベンチュラで果物の栽培を続けるのも一つのやり方だ。でもそれはやがて生まれる子の立場からみれば正しい選択だとは言えない。わが子は物心がつけば、必ずあたしに、わたしの父ちゃんはどこにいるの、と聞く。「父ちゃんは星のかなたの国の王様の所に行っているの」とお伽噺をすれば、しばらくの間通用するかも知れない。しかし、それが虚偽だと分かった時、その子は失望のどん底に落ち込み、母は頼りにならない人間だと思い込んでしまうだろう。では正直にお前さんの父ちゃんは武田武彦という方、日本の大学の先生、と答えたとする。「どうしてわたしに会いに来ないの」という質問が次ぎに出てくるに決まっている。「父ちゃんの所に行く」と言い出したら始末に終えなくなってしまう。東京まで出かけて、彼の妻や子供や同僚の前で、「武彦、あなたの落とし子です」といってその子を残しておけばいいのか。なんだか生まれてくる子が気の毒になってしまった。

結婚せずに子持ちになることはあたしが一生結婚をしないことを意味する。そのような犠牲をあたしが払う決心ができていないか、と考えると今度はあたし自身が可哀そうになった。人工墮胎はアメリカでもフランスでも法律で禁止されている。医者への助力なしでそれを試みれば命をおとすこともある。しかし、パリで伯母がヨーロッパの著名医師を探してくれるのは簡単なことだ。伯父が代表している会社には一流の薬品会社が含まれており、医療界での交友範囲が広い。あたしの場合、医学的には妊娠がテストによって確認されていない時点なので、診てくれる医者に迷惑をかけることはあるまい。ニューヨークを出る前、あたしは武彦におろす、と言っていないながら決心がつかなかったが、オルリー空港についた時に

は、それが正しい結論だと考えていた。

アパートにタクシーで着くと、食堂のテーブルの上に赤いバラが一枝活けてあり、ワインとチーズがあたしのために用意されていた。その側に伯母の手で、「ヘンリー

(伯父)の仕事のため、出かけているが一二時には必ず帰ってくる。パリにきてくれてとても嬉しい」というメッセージがあった。ワインを嗜め、座ると時差と疲れが一気に出てきて、深い眠気におそわれた。

気がつくと、伯母があたしの頭を撫でながら側にすわっていた。「疲れたでしょうね、アンドレア」懐かしい声だ。すぐ抱き合っ、あたしは一部始終を出来るだけ細かく、そして何をも隠さず、伯母に報告し、「おろすか、おろさないか、というのが今一番大きい疑問です」とつけくわえた。

「いい医者を探してくれ、と言ったら勿論探してあげますよ。アンドレアはもう大人だから、とやかく言いません。ただひとつお母さん代わりに忠告してあげるわ。今から二〇年立ったあとで後悔するようなことをしてはいけません。おろすとか、おろさないとか、それはあなたが決めるもの。でも一度おろしたらあの幼い命は二度と帰ってきませんよ。三日お待ち、じっくり考えて頂戴。そして三日立って、やはりおろすと決めたらお医者さん探してあげるわ。」伯母はいつもの伯母で、愛情にみちていた。あたしは歩みより、伯母を抱いて頬にキスをし、しばらく彼女から離れなかった。

伯父がディナーに帰ってきて、あたしの窮境をうすうす察していたようだが、それを一切口にせず、あたしを歓迎してくれた。